

## 「ロイヤル・アフェア 愛と欲望の王宮」



2013（平成25）年2月28日鑑賞＜GAGA試写室＞

監督・脚本：ニコライ・アーセル

ヨハン・フリードリヒ・ストルーエンセ（野心家のドイツ人、クリスチャン7世の侍医）／マッツ・ミケルセン

カロリーネ・マティルデ（王妃）／アリシア・ウィカンダー

クリスチャン7世（精神を病んだデンマーク国王）／ミケル・ボー・フォルスガード

ユリアーネ・マリーエ（皇太后）／トリヌ・ディルホルム

オーヴェ・ヘー＝グルベア／デヴィッド・デンシック

ランツァウ伯爵／トマス・ガブリエルソン

プラント／サイロン・メルヴィル

2012年・デンマーク映画・137分

配給／アルパトロス・フィルム

### <デンマークは『ハムレット』だけではない！>

日本人にとってノルウェー、スウェーデン、デンマークといういわゆる「北欧三国」は馴染みが薄く、デンマークといえばシェイクスピアの『ハムレット』くらいしか浮かんでこないのでは・・・しかし、18世紀後半に①ドイツ人の医者がやってきて、②王妃と関係を持ち、③デンマークの国を支配したが、殺されてしまったという物語はデンマーク人なら誰でも知っているらしい。その時代はフランス革命の20年程前のことで、ドイツ人医師とはヨハン・フリードリヒ・ストルーエンセ（マッツ・ミケルセン）のこと。そして、王妃とはイギリス王室から王妃としてデンマーク王クリスチャン7世（ミケル・ボー・フォルスガード）に嫁いできたカロリーネ・マティルデ（アリシア・ウィカンダー）のことだ。そう聞くと、多くの日本人はいかにも週刊誌が飛びつきそうな「王室不倫スキャンダル」だと思ってしまうし、多くのデンマーク人の理解もその程度かもしれないが、さてその真相は？

それについてプレスシートを読むと、「素晴らしい物語ですが、歴史的にどのくらい正確なのでしょうか。どの程度の脚色となされているのでしょうか。」との質問に対して、ニコライ・アーセル監督は「あなたが思っている以上に史実に忠実だよ。とてもクレージーで、素晴らしいけど・・・登場する人物やその展開はおとぎ話のようだからね。でも、すべて実際に起きたことなんだ。脚色したのは、いくつかのシーンだけだ。もちろん、当時の会話をその場において聞いたわけじゃないから、その時、その場で彼らがどう感じたかを想像して膨らませている。彼らはどんな言葉を交わしたかとか。でも、多くの出来事は基本的にありのままに描いている」と答えているから、歴史モノの大好きな私は興味津々。当時の啓蒙思想の影響を受けていたストルーエンセが教会支配、貴族支配の制度を改革したことによって旧勢力からの激しい抵抗を受け、凄まじい権力闘争が展開されるさまを見れば、ストルーエンセとカロリーネとの「不倫スキャンダル」という構成は、旧勢力が国民に植え付けようとした陰謀だったのでは、と思ってしまう。そして、そう考えると本作の英題は『A Royal Affair』だが、それに「愛と欲望の王宮」というサブタイトルを加えた邦題もなかなかの出来だ。

### <嫁ぐ前の事前調査は？なぜドイツ人医師が王の侍医に？>

1770年にオーストリアの王室からマリー・アントワネットがフランス国王ルイ16世のもとに嫁いできた時も、私が観た映画『マリー・アントワネット』（06年）（『シネマルーム12』283頁参照）や『マリー・アントワネットの首飾り』（01年）（『シネマルーム1』68頁参照）等での「情報」によると、ルイ16世についての事前調査は十分でなかったようだ。そして、それは本作も同じ。せっかくカロリーネが大国のイギリスから小国のデンマークに15歳で嫁いできたのに、クリスチャン7世の晩さん会でのあの扱いは一体ナニ？さらに初夜でのあの扱いは一体ナニ？これが精神不安定な病氣から来るものだとしても、カロリーネがそれを許せなかったのは当然だ。もっとも、それでも子供はできるから不思議なもの。しかし、第一子フレデリクを産んだ頃には、カロリーネとクリスチャン7世の夫婦関係が完全に冷めてしまっていたのは仕方ない。

そんな状況下、クリスチャン7世がドイツに外遊していた時に王の「侍医」として採用されたのは、庶民の中に入って働いていたドイツ人医師のストルーエンセ。これは当時、王の側近から遠ざけられてしまっていたランツァウ伯爵（トマス・ガブリエルソン）とプラント（サイロン・メルヴィル）の「ある策略」にもとづく推薦によるものだが、このドイツ人医師が王の侍医に選ばれたのは、やはり彼の庶民的で気取らない魅力がクリスチャン7世の心をとらえたためだ。デンマークに戻ってから一緒に娯楽をはしごしたり、飲み歩いたりしていたから、2人ともあまり行状はよろしくないが、それでも退屈な枢密院での閣議にストルーエンセが出席するようになると、俄然、彼の発言力は増大し・・・。

### <ヴォルテールやルソーの啓蒙思想とは？>

ヴォルテールやルソーの啓蒙思想とは、ウィキペディアによれば、「あらゆる人間が共通の理性をもっている」と指し、世界に何らかの根本法則があり、それは理性によって認知可能であるとする考え方である。方法論としては17世紀以来の自然科学的方法を重視した。理性による認識がそのまま科学的研究と結びつくと考えられ、宗教と科学の分離を促した一方、啓蒙主義に基づく自然科学や社会科学の研究は認識論に著しく接近している。これらの研究を支える理論哲学としてはイギリス経験論が主流であった。」と定義されている。イギリスではじまり、ヴォルテールの『哲学書簡』やモンテスキューの『法の精神』によってフランスで広がった啓蒙思想は絶対王政を批判する武器として使われたが、当時のデンマークでは検閲制度があったため、そんな危険思想の本は出版禁止とされていたらしい。また、当時のデンマークは拷問も合法だったそうだから、まさに教会支配、貴族支配の時代だったわけだ。

カロリーネは当初ストルーエンセを夫クリスチャン7世のお気に入りの嫌味な「遊び人」とばかり思っていたが、その考えを大きく転換させる出来事が2つ起きた。その一つはカロリーネがストルーエンセの書棚からルソーの本を発見し、その本を借りたことから政治のあり方についての共通の話題が生まれたこと。もう一つは、コペンハーゲンで天然痘が広がる中で予防接種の必要性を説くストルーエンセが幼き皇太子への予防接種を断行し、成功させたこと。これを見たカロリーネは広く国民への天然痘の予防接種の必要性を枢密院に提案したから、ストルーエンセはその行動力に感銘を受けたのは当然だ。さらにカロリーネは国の改革のためには積極的に王の権力を活用すべきことをストルーエンセに進言。これを受けたストルーエンセが枢密院を舞台に仕立て、そこで台本に沿って発言することを芝居好きのクリスチャン7世に進言すると、まんまとクリスチャン7世はそれに乗ってきたから、以降、枢密院の改革が少しずつ実現することになる。なるほど、なるほど、ここまでクリスチャン7世の側近に復帰できたランツァウ伯爵とプラントの悪感が大成功したばかりか、フランスでもまだ実現できていなかった「啓蒙思想にもとづく上からの改革」がデンマークで広がりはじめたことに、フランスの啓蒙思想家ヴォルテールも大喜び・・・。

### <この一線越えはまずい！妊娠はもっとまずい！>

中国映画『さらば、わが愛／霸王別姫』（93年）に見る段小楼と蝶衣と菊仙による男二人女一人の三角関係もわかりにくかった（『シネマルーム5』107頁参照）が、本作に見るクリスチャン7世とストルーエンセそしてカロリーネとの「三角関係」はもっとわかりにくい。それは、クリスチャン7世のストルーエンセに対する信頼が異常に厚すぎるからだ。本作中盤に見るストルーエンセを真ん中にしたストルーエンセとクリスチャン7世そしてカロリーネ3人の「政治改革」への取り組みを見れば、皇太后ユリアーネ・マリーエ（トリヌ・ディルホルム）を中心とした「守旧派貴族たち」の抵抗は強いものの、小泉改革と同じように成果を着々と上げていたことはまちがいない。それはフランスの啓蒙思想家ヴォルテールから称賛の手紙が届いたことを見て明らかだ。

しかし、去る2月12日に観た『アンナ・カレーニナ』（12年）で人妻のアンナが舞踏会で身体を寄せ合って踊った青年将校ヴロンスキー伯爵とそのままベットインしてしまったのと同じように、本作でも仮面舞踏会での高揚の後2人は結ばれることになったが、これはいかにまずい。2人とも大人なのだから、それを避けるくらいの分別は持たなければ・・・。さらに男女の仲はいったん一線を越えてしまうとズルズルとそれに溺れてしまうのが常だが、その挙げ句カロリーネが妊娠してしまったというのは最悪。密会を重ねるについては侍女たちの口を封じることはもちろん、「その行為」時には避妊処置くらいはちゃんとしておかなければ・・・。

### <この権力闘争に注目！勝者は？敗者は？>

中国共産党の内部における「太子党」VS「共青団」の対立＝権力闘争はすごいが、日本でも2005年8月の郵政解散をめぐっての、当時の政権与党であった自民党内の権力闘争はすさまじかった。郵政民営化に反対する勢力に対して、同じ自民党内から「刺客」をたてた小泉純一郎元総理総裁の決断力に多くの日本人がビックリするとともに、拍手喝采を送ったが、さてその後は・・・？

フランス革命前のデンマークにおける枢密院や閣議の機能がきわめてチャチだったのは仕方ないが、それでも「改革派」VS「守旧派」という対立の構図は昔も今も全く変わらず、興味深い。皇太后ユリアーネがクリスチャン7世の代わりに、自らの息子であり、クリスチャン7世にとっては腹違いの弟になるフレデリクを王位に就けようと狙ったのは当然だし、クリスチャン7世の過激な改革を快く思わない枢密院議長ら保守派がこれと手を組んだのも当然。他方、王政の国にあって王の権力が絶対であるのは当然だから、枢密院でストルーエンセの解雇と国からの追放の動議が可決されそうになると、クリスチャン7世が敢然とこれに反対したばかりか、逆に議長の罷免と枢密院の解散、そして新内閣の発足を宣言したのはすごい。もっとも、新内閣と言っても、それを構成するのは事実上ストルーエンセとクリスチャン7世の2人だけ・・・？

安倍晋三新総理は就任後「アベノミクス」と呼ばれている経済政策を重点的に実施し、憲法改正等の持論の展開は夏の参議院選挙まで我慢しているが、ストルーエンセとクリスチャン7世は①拷問の廃止、②検閲の廃止など次々と「改革」断行したから、フランス人の啓蒙思想家らはこれを絶賛。しかし、その裏で着々と進む権力奪還の企みとは・・・？

### <この嘘はいかに辛い！それでも・・・>

『さらば、わが愛／霸王別姫』の場合は、男二人女一人の三角関係といっても、もともと段小楼と蝶衣が結婚していたわけではなく、それまで男同士で結ばれていた段小楼と蝶衣の間に新たに菊仙が入り込んできたことによって生じた微妙な三角関係だった。しかし本作の場合は、結婚しているクリスチャン7世とカロリーネ、しかもそれが王と王妃という男と女の間に、王の侍医にすぎないストルーエンセが入り込み、王妃と不倫を働いたという構図だから、バレたら弁解のしようがないのは当然。しかも、ストルーエンセの子を妊娠したことがわかったにもかかわらず、カロリーネはこれをクリスチャン7世の子として産むというのだから、ハチャメチャ。もちろん、ストルーエンセは当初これに反対したが、カロリーネの決心が固いことがわかるとやむなくそれに従うことに。

そして、カロリーネは無事、女の子を出産。これにはクリスチャン7世も大喜びだが、さてストルーエンセとカロリーネの嘘は一体いつまで持ちこたえられるの？子供を育てるだけのカロリーネはまだしも、政務を一人で取り仕切りながら、次第に自分に対して疑いの目を向けてくる唯一人の庇護者であるクリスチャン7世に対して、ストルーエンセはどう対応すればいいの？ストルーエンセにとって、これはいかに辛い！しかしそれでも、不倫スキャンダルがバレたら、自分とカロリーネはもちろん、クリスチャン7世の王位もおしまい。ここは、あくまでシラを切り通すしかない。そんな決意の中、ストルーエンセはクリスチャン7世に対しては嘘をつき通しながら日々の政務をこなす、政敵たちと厳しく対峙していたが・・・。

### <少し性急すぎた（？）「愛と欲望の王宮」の行方は？>

本作で王妃カロリーネを演じたアリシア・ウィカンダーは、第85回アカデミー賞衣裳デザイン賞を受賞した『アンナ・カレーニナ』では、失恋を経て片田舎の領主であるリョーヴィンと結婚し、幸せな生活を送る女性キティ役で登場していたが、主演のキーラ・ナイトレイと比較するためか、あまり美女とは思えなかった。しかし本作では、清楚なドレス姿から、当時としては珍しい横乗りではなく馬にまたがっての颯爽とした乗馬姿、そしてごく一部ながら大胆なベットシーン（？）まで、若く美しいその魅力を存分に見せつけてくれる。その美しさは、一人目の子供を産んだ後ストルーエンセとの不倫に明けくれる日々では際立っているし、二人目の子供を産んだ後もなお健在だ。

不倫スキャンダルがバレてストルーエンセが逮捕されてしまうと、クリスチャン7世にはそんな事態を打開する能力はないから、さてストルーエンセの命は？そして、カロリーネの身の上は？高倉健が吉永小百合と共演した『動乱』（80年）では、心の底から現在の国の状況を憂え、国家改造を成し遂げようとして、「2.26事件」に決起した青年将校の姿が描かれていたが、その結末は悲しいものだった。1789年に起きたバスチーユ牢獄襲撃に始まるフランス革命のバックに啓蒙思想があったことはまちがいない。しかし、フランス革命後もその改革は一本調子に進まず、改革と反動を何度かくり返すことになったことからわかるように、革命はそう簡単に成し遂げられるものではない。カロリーネはストルーエンセの助命を心から願い、一時はそれが実現できるかと思えたが、さて「愛と欲望の王宮」の行方は？